

宝の海・有明海

有明海は内湾性の遠浅の海で、干満差は日本で6mにも及び、干潮時には広大な干潟が現れます。筑後川や矢部川など多くの河川が流れ込んでいるため栄養分が多く、魚介類の宝庫であるとともに全国有数のノリ養殖漁場でもあります。また、ムツゴロウ、ワラスポなど国内では有明海以外では見られない生物が多数生息しており、たいへん貴重で大切な海です。



干潟に沈む夕日

有明海の干潮によって広大な潟が創り出され、そこに夕日が映り、きらきらと照り映える光景はまさに絶景です。北原白秋もこの美しい夕干潟を歌に詠んでいます。
～西目して潮満つるまの夕干潟宮み長く蟹ぞつばやく～



ノリ船の出船・入船

ノリの養殖は柳川市を代表する産業であり、ノリ船が、豊漁を願い有明海に向けて出港していく勇ましい姿、そして仕事を終え堂々と港へ帰ってくる姿は、柳川市ならではの風景です。特に、毎年10月上旬の種付け解禁の日、朝もやの中水しぶきを上げながら一斉に多数の船が出港する様は圧巻です。この日はノリ漁師にとって特別な1日であり、出港風景に見られる「勢い・力強さ」は、豊漁を願う漁民の祈りの強さを表しています。



潮干狩り

有明海の日本一の干満の差によってできる広大で肥沃な干潟を利用して行なわれる潮干狩りは、「宝の海」と呼ばれる有明海とそこに棲む珍しい生き物たちに身近に触れることができる遊びとして、昔から盛んに行なわれてきました。



干拓堤防の景観 大和町皿垣開、橋本町など (MAP 1-②)

市内南部の各地で見られる堤防跡は、有明海の干拓の歴史を感じさせてくれます。干拓のために築かれた堤防は、周囲より小高くなるため、航空写真などで見るとその跡がはっきり確認でき、海に向かって魚鱗状に農地を増やしていった干拓の歴史がうかがえます。また、大和町皿垣開などで見られる堤防跡の大きな曲線状に民家が立ち並ぶ集落や、両開の橋本町などで見られる堤防跡に草木がうっそうと生い茂り、田園地帯を横切るグリーンベルトとなっている風景は、干拓地ならではの景観です。



有明海佐賀福岡両県漁場境界標石柱と永松荒籠

久々原・海岸堤防付近 (MAP 1-③)

筑後川尻での福岡、佐賀両県の有明海漁場紛争は、藩政時代から続いてきましたが、明治40(1907)年に両県は協議会を開催し、翌41(1908)年に漁場の境界が定められました。そのことを記念して、明治43(1910)年4月2日、

筑後川河口の両県の陸地に2つの同文の石碑が建てられました。この有明海佐賀福岡両県漁場境界標石柱は、平成17(2005)年には水産庁の「未来に残したい漁業漁村の歴史文化財産百選」に選ばれました。石柱が建っている所から筑後川に向かって伸びている荒籠は、防波堤なのか船着場なのか起源ははっきりしませんが、昔からあるもので、漁師の目印にもなっています。荒籠は、以前は他の場所にもあったようですが、市内で現存しているのはここだけです。



有明海の幸

魚介類の宝庫である有明海には、魚類約130種、貝類約30種が生息しているともいわれ、ムツゴロウのように他では見られない珍しい生物もたくさんいます。また、有明海産のワケ(イソギンチャク)、メカジャ(ミドリシヤミセンガイ)、クッソコ(シタビラメ)、シャツパ(シャコ)、タイラギなどは、郷土料理としても親しまれています。



二丁井樋と船溜り 稲荷町 (MAP 2-①)

市内を巡った掘割の水が再び沖端川へと注ぎ込む二丁井樋の周辺は、昔ながらの漁村の面影を残しつつ、新たに整備されており、周囲にも随所に柳川らしさを感じられる場所が残っています。この付近は、かつて有明海産物や海運の荷揚げ場として賑わいがあり、海の恵みと人々の活気で満ち溢れていたところですが、近年の漁港整備で船溜りが下流の方へ移動し、雰囲気は変わってきています。



ノリひび

秋になると有明海一面に支柱が林立し、色とりどりの網が張りこまれ、ノリの養殖が始まります。海面を覆うように広がるノリひびは、秋から春にかけての有明海ならではの風景です。



蜘蛛手棚 (MAP 1-①)

蜘蛛手網は四つ手網とも呼ばれ、竹竿を組んで網を張り、支柱の先端に結わえ付けた縄を上げ下げして小魚などを取る昔ながらの漁法です。今でも干拓堤防沿いに網を張る「蜘蛛手棚」が散在しています。有明海らしい海辺の景観としてもよく紹介されています。



中島朝市 大和町中島 (MAP 1-④)

大和町中島の大徳商店街の通りで毎朝行われる自由市場は、江戸時代から続くといわれる名物の朝市で、有明海の海の幸と地元産の新鮮な大地の恵みを買うことができます。